

## キャリア教育優良学校として文部科学大臣表彰



12月7日(金)、文部科学省のホームページに「第12回キャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等文部科学大臣表彰」に本年度の受賞校等に関する記事が掲載され、そこで本校が選ばれたことが12月13日(木)、教育委員会より正式に被表彰校の決定の通知がありました。

今回の文部科学大臣表彰の受賞校等は、教育委員会の部12団体、学校の部97団体、PTA団体等の部10団体、合計119団体です。なかでも今回、本県での受賞校等は、本校だけの受賞となりました。

本校が本県教育委員会から文部科学省に推薦されたのは、入学から卒業までの3年間を見通したキャリア教育実践プログラムが確立され、各年次における目標を明確に示し、その実現へ向けた年間指導計画がきめ細かく策定されているという理由からです。

本校は前身の横浜清陵総合高等学校の設立以来、科目「産業社会と人間」、総合学科の特色科目を配し、キャリア教育を展開してきました。また、普通科に改編されても、「総合的な学習の時間」を活用し、1年次の地域社会や社会人へのインタビュー、2年次のクエストエデュケーションの企業探求、「視点」、3年次の探求というプログラムを配してキャリア教育を実践しています。いままでの総合学科のキャリア教育と、普通科のキャリア教育の実践が、今回のキャリア教育優良学校の受賞に繋がったのです。

同じく12月7日には学校運営協議会(コミュニティスクール)が開催され、本校最後の「探求」の発表会を、委員の方々に見ていただき、会長の明治学院大学岡明教授より講評で総体的に良い評価を得ました。ここに総合学科として特色科目はカリキュラムから姿を消すこととなります。しかし、字こそ異なりますが、本校は平成30年10月1日(月)、神奈川県教育委員会より次期学習指導要領における「総合的な探究の時間」の全体研究の指定を受けました。この指定を受けることになったのも、総合学科で培ってきた特色科目等の実績があったからに他なりません。いままで総合学科で培ってきたキャリア教育の実践を、この「総合的な探究の時間」等に引き継ぎ、探究学習やキャリア教育のパ

イロツト的役割やリードする役割を果たさなくてはいけないと思っています。

なお、キャリア教育に関する文部科学大臣表彰の表彰式は、平成 31 年 1 月 18 日(金)に開催されます。(表彰式に関する事を報告する予定です。)

### 11 月 27 日(火) 研究授業開催

本年度の研究授業が 11 月 27 日(火)

5・6 校時、多目的室において黄金井教諭の「コミュニケーション英語 I」(1 年 1 組)の授業と、講評並びに講演を帝京大学土持ゲーリー法一教授、宮原俊之准教授に務めていただきました。黄金井教諭の英語の授業に関して、米国や日本の



の大学で博士号を取得した土持ゲーリー法一教授が「私だってあんなに上手く教えることはできない」という良い講評をいただき、改めて黄金井教諭の英語授業力の高さと、英語教育の難しさを感じたしだいです。

高大接続改革が進展し、大学入試でも英語民間検定試験を導入する大学が増えていく可能性が高いなか、本校の英語教育でも、いかに生徒に英語を使うことができるかが重要になってきます。

文部科学省は 2013 年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を提出し、中学・高校での英語の授業は、原則英語のみで行うことを基本とすることを示しました。

筆者は中学・高校・大学まで約 10 年にも及ぶ英語教育を習ってきたにも拘らず、英語を話すことはできません。いままでの英語教育は読み書き重視の英語教育だったのですが、現在の英語教育はコミュニケーションの場と捉えています。それは科目名「コミュニケーション英語 I」にも表れています。

英語の授業を原則英語で行うことは、教員によるオンリーイングリッシュを意味するのでしょうか。日本語を使用せず、英語だけでスピーチしたり、会話練習したりすることでしょうか。イメージ的には教員が英語で教えるように考えがちですが、やはり生徒が英語を使って会話練習やスピーチすることが大切なのです。授業は教授主体の教員と、学習主体の生徒の行為が表裏一体となって成立するものなのです。

原則英語だけの授業は、英語 4 技能の習得に役立つとか、コミュニケーション能力の向上、教員の英語力向上などの利点があります。しかし逆に、不得意な生徒がさらに苦手意識を持ってしまい、文法や英作文など日本語で教授した方が効率がよい、英語教員の英語力のアンバランスなどの課題が指摘されています。これらの課題を克服しながら、今後の英語教育を進めていかななくてはなりません。